慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ゲーテにおける人間的自然の概念とその根本直観について |
| Sub Title | Begriff und Grundanschauung der menschlichen Natur bei Goethe |
| Author | 西村, 皓(Nishimura, Hiroshi) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1965 |
| Jtitle | 哲學 No.47 (1965. 12) ,p.125- 140 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | Goethe hat geglaubt, die Natur sei ihm auch allen Menschen nie fremd, sondern Mensch sowohl als Natur sei wesentlich gleich. Das Verhaltnis der Natur zum Menschen ist das der harmonischen Ganz-Einheit. Im Grund solches Gedankens ist herrschend eine mystische Grundanschauung, glaube ich. Nach Goethe entsteht das All aus dem einzigen gottlichen Wesen, die Natur ist nur seine aussere Erscheinung, der Geist nur sein inneres Phanomen. Um es kurz zu machen, wird der Entfaltungsverlauf vom einzigen einheitlichen universalen Ursprung zur geistigen Entwicklung order zur naturlichen Erscheinung. Daher bei Goethe waren allen Menschen nie im Gegensatz zur Natur gestanden. Aus solcher harmonischen einheitlichen Weltanschauung geschliessen, gibt es keinen unterschied unter allem deswegen als der gottlichen Natur, weil jede Natur, die sich mannigfaltig entwickelt, grundsatzlich wesentlich ein und dasselbe gleich ist. In dieser Hinsicht kann ich es sehen, dass Goethe von Spinoza beeinflusst worden war, und, dass er damit 'Deus sive Natura' geglaubt hatte. Wenn man fragt, in welcher Hinsicht Goethe Interesse an der Natur und dem Leben gehabt hat, dann glaube ich, dass er die Beziehung zwischen Gott und Individualitat klar macht. Goethe hat gedacht, Natur sei Gott, Individualitat sei Gott, namlich Gott bestehe immer in dem ganz harmonischen Zustand der Individualitat. Goethe hat das Einzelne im Ganze angeschaut. Die ganzheitliche Anschauung ist uberall im Fall vorgegangen, wenn Goethe den einzelnen Gegenstand geforscht und betrachtet hat. Das ist die Haltung, um das Einzelne von der ganzheitlichen Einsicht auszugehen. Goethe hat die mannigfaltigen Naturerscheinungen als die Ganzheiten erhalten und die Veranderung der Natur als ihre kontinuierliche Entwicklung aufgefasst. Man kann es finden, dass solche Einheitsanschauung, solche vollkommene horntonische Anschauung herrschend im Goethischen Grundgedanken der entwicklungstheoretischen kontinuierlichen Entwicklung der Natur ist. Goethe hat geglaubt, dass die Urform dem All zugrunde liegt und sie Entelechie im Grunde alles Entwick-lungsprozesses ist. Diese 'Urform' liegt der Naturerforschung Goethes zu Grunde. |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000047-0125 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ゲーテにおける人間的自然の概念とその根本直観について

西　村　　皓

フレーベルの第一遊具のシムボルを刻み込んである彼の墓を通って，シュヴァイナ村からチューリンゲンの谷を上って境界道をつきぬけていくと，あの「親和力」[1]の宿命的な舞台のあるヴィルヘルムの谷間に行きあたる．われわれの詩人は，このすぐれた小説のなかで，人生の迷路へわれわれを踏み入らせてしまう．あの若く美しいオティーリェがいかにつれなく運命の支配を受けることか．大きな道徳的な不幸の出来事のために，不毛の砂漠へ引き戻された人間が，どこにも隠れ場所がみつからずにさまよい歩く有様を，我々は歴史のなかに見出すことはないだろうか．この迷える羊を正しい道へ導くために，人類の智慧はその輝きを失ってはならない．

親和力のなかでわれわれが足下にふまえている大地こそ，人間の教育の領土なのであり，出発点なのである．フレーベルの第一恩物であるクーゲル（毬）と第二恩物であるクーブス（立方体）とは，不変的なものと可変的なもの，法則と自由，個体性の変化と偶然的な事情の作用とをそれぞれ象徴的に表わしているのである．感覚的直観の友ゲーテは，このような象徴をヴァイマールの彼の庭に立てたのである．クーブスとクーゲルとは，ゲーテにおいて，歴史における主要な要素としての個を代現するものであったのである．われわれの生命活動のあやなす織物は，種々様々の糸で織り成されている．そこには必然的なもの，偶然的なもの，恣意的なもの，

純粋に目的的なもの，こういうものが種々様々の仕方で密接に結合しているのである．

ゲーテは，その生涯を通じて，これらの糸に，あるときはよろこんで，またあるときはやむをえず，従ったのである．青年ゲーテは，性向のうつろい易さ，人間の本質の無常さ，道徳的感覚，そして人間の生命の謎として人間の本性，人間の自然のなかに結合されているとみられる，高くして深いものを思念し追求してやまなかったのである．ゲーテは，自己の悩みを，歌(リード)に，格言的短詩(エピグラム)に，あるいはまた韻詩(ライム)に託したのである．これらにみられる短い言葉は，永遠のひびきをもってわれわれの心の奥深くに切々と訴えてくる．われわれは，あの啓蒙時代が偉大なる思想の徴候を有していた一切のものを，ゲーテの美しい詩の衣の下に再び見出すのである．あたかも近代の精神がデカルトを契機として突如として現われたのではなく，すでに中世の半ばにおいてダンテ，ペトラルカ，ボッカチオらのうちに芽生えていたように，シュトゥルム・ウント・ドゥランクにおいて頂点に達した生命の炎は，すでに啓蒙時代に芽生えていたのである．

周知の如く啓蒙主義は第十八世紀にイギリスとフランスにおいて哲学的認識の，従来の形式である形而上学的体系の形式を打破することから始まったのである．啓蒙主義は,「体系の精神」を継念し，これを意識的にしりぞけはしたが，決して「体系的精神」を捨て去ったわけではなかった．啓蒙の哲学は単なる「反省の哲学」ではなかった．それは単なる思惟の領域にとどまるものではなく，人間の一切の精神的活動がもっとも根底的な秩序にまで肉迫することを要求したのである．

啓蒙主義が何よりもまづ信じて疑わなかったことは，人間は自己の思想を自己自身から自発的に発展させていく存在であるということ，従って人間はもともと模倣的になぞった路の上を歩かされることに決して満足しない存在なのである．しかし啓蒙主義の根本的欠陥は，自己主観的尺度を，絶対的な，唯一の妥当で可能な規範にまで高めて，それであらゆる歴史的

過去を裁断した，ということであろう．ロマン主義が啓蒙主義を非難したのも，多くはこの点においてであったが，これを他の面からいえば，生と自然，生と宇宙の関係に対する見方を根本的に異にした，ということであろう．

第十八世紀の哲学的精神は，認識における主体性の原理の確立という，人類の精神の歴史の上に偉大な功績を残したのである．かってはわれわれの認識主観は客観体に従属し，これを模写するものの如く考えられていた．カントはこれを批判して，対象はわれわれの認識主観によって逆に構成されると考えた．彼はこれを，認識論上の「コペルニクス的転回」と称したのである．

歴史の歯車は，偉大な響きを立てて廻りはじめた．コペルニクスが崩壊させた世界観の顚覆によってなお余震が残っていた．新たなプロメテウスの出現によって，生と宇宙，生と自然の間に新たな火がともされかがやいたのである．もはや一切のものは，大地の「侍女」ではなくなったのである．太陽，月，星は，人類の日夜を明るくするために，もはや大地により添うことはなかった．われわれの世界の両面としての天国と地獄とはもはや存在しなかったのである．われわれの遊星は，無数の遊星のなかの一つにすぎない．そして無数の遊星は，勿論まだ秘められた設計図に従って運動しているのである．

閉ざされたものを開かんとし，秘められたるものを顕わさんとするのは，人間の本性のあくなき希求であろうか．啓蒙時代の巨人たちは，進んで「どうして」(Wie) と問い，真理究明のプランを提示してやまなかった．人間は，よくいわれることだが，上は天界に通じ，下は悪魔の世界に通じているこの現世界，この可視的世界の唯一の理性的の住民であった．この理性的存在者の住するこの世界が，まさに突如として生じたのである，あたかもドイカリオンの神話のように[(2)]．

世界の概念が無限に高まり，その表象があらゆる存在の最後の根底から

ひろがっていったとき，人間の諸力もまた成長していった．人間はますます偉大な存在となり，あらゆる事物の尺度としての位置をますます固めていった．なぜなら，人間は有史以前から封ぜられていた宇宙の法則の書物を読解することができたからである．しかし当時の人たちにとって，これらの世界はまったく未知の，見慣れていない世界であり，そこからくる光は，彼らの眼にはあまりにもまばゆいものであった．彼らは何としても夢見ている気持であったろうし，まったく呆然としたことであろう．しかし人間は，この不安と期待につつまれたよろこびをはっきり自覚し，人間の自立的本性を取り戻したのであった．人間は古いものの代りに新しいものを置き変えた．もはや以前の子供っぽい直観は終ったのである．とはいえ，以前に比べればはるかに進歩した人間の知識の倉庫も，まだはじめのうちは，がらくた小屋同然で，まちがった概念で一杯であった．第十七世紀の終りごろは，またそんな有様だったのである．

第十八世紀は，まさに，かかる誤れる概念を追放すること，啓蒙への，精神の解放を完遂することをその課題としていたのである．そしてこの役目を果したのが自然科学であった．

自然，それはずっと以前から標識のようにかかげられた言葉であるが，ルソー以来，ことに流行のようになった．しかしその意味するところは必ずしも判然としてはいなかった．自然の認識を前進させるために，ある一定の立場を確立する必要があることがだんだん判ってきた．宇宙への真の洞察を獲得するために，この課題に専心しようと多くの人たちが参加したが，その最も重要な精神，ゲーテこそその第一人者であったのである．

ゲーテは新しい世紀に臨んで，人間にかかわる一切の問題を解決すべく，最も深く探究の歩を進めた人であった．

では，いかなる力が人間の生活を制約し且つ形成するのであるかという問題を，ゲーテの立場から考察してみよう．

もっともわれわれがゲーテの哲学の中へ入っていって，彼の世界観を体

系的に構成したり，また彼の思思を一切もれなく描写することはできるべくもない，ただ少くとも，その世界観の所在へ近寄り，これをスケッチすることはできるであろう．

ゲーテは，自己の哲学的立脚点を，どこにもまとまった形ではわれわれに示してくれなかった．しかし彼の著作のどの言葉を換えてみても，そこに彼の世界観の尖端を見出すことができるであろう．彼の著作のあちらこちらに彼の世界観が散見されるのである．われわれはそれらを概観して一つのまとまりある形にする努力を払わなければならない．しかも彼の生命のこもった言葉に表わされている精神を破壊しないように用心しなければならない．その際，汎神論，すなわち神と世界とは一つであるという考えが，天地創成説の支配的立脚点として生じてくる．ゲーテの人間学は，同時におのづから進化論，ダーウィニズムのなかへと入っていく．

では自然に対する人間の位置如何に注目するならば，ゲーテにおいて，いかなる光のなかにそれは明らかとなるか？　ゲーテはこの宇宙を何と解するのであろうか？

「汝，われをよく理解せんと欲するならば，汝，自然がいかにわれを見出すか，われがいかに自然を見出すかを知らねばならぬ，われわれが出会ったときに．そのときに汝は，わが知覚のあとを知る[3]」

とゲーテみづから告白している．ゲーテの天才的な感受性は，自然の生命に接して，大地の四季の変化を感じ取り，あるいは遠乗りに狩りに，あるいは水浴に，庭の露台での眠りに，冬のスキーに，その自然からくる生命を吸収する．

「新鮮な食物，新しい血を，私は自由な世界から吸収する．私をその胸にいだく自然の，いかにしてかくもやさしく，好意あることか[4]．」

ここに表わされている彼の精神は，再三再四まったく異った表現で，その都度の新しい感覚から，彼のすべての著作のなかに表現されている．ゲーテは，その生涯の遍歴のなかで，いつも自然の腕のなかに身を横たえてい

た．彼は，内的自然をして，自己の内なる自然をして，その特性に従ってそのなるがままにまかせ，外的自然をして，その固有の性質に従って添えしめる．ゲーテは，内面的に自己を一切の無関係のもの，本質にないもの，固有でないものから解放せんと努力し，外的なものを，愛情こめて観察し，一切の存在を，できるだけ判りやすく，しかも深く人間的に観ることに努めたのであった．人間が自己の性質に従って存在する如く，他の一切の存在もそれぞれに与えられてある存在の仕方に従って存在しているのだと考える．こうしたゲーテの内的努力，精神的志向から一切の自然の対象や全体のなかへ発するひびき——それは住いや季節の変遷において深く触れてくるところのものであるが——と親しく結合しているあの不思議な親和性（Vevwandtschaft）が生じたのであった．

ゲーテはこのようにつねに自然に誠実に帰服し，感謝していた．ゲーテは自然との主体的なかかわり合いにおいて，自然が彼に成ったもののなかに，自分と分ちえない驚嘆すべきものを見出した．彼は自然とのかかわり合いにおいて，いつも自然に合一せる自分をそこに見出したのである．そのばあい，自然は彼にとって決してフレムトなものではなかった．彼においては，人間も自然も根源的には一つでなければならなかった．自然と人間との関係は調和的全一体の関係であった．このような考えの底には，一つの神秘的な根本直観が流れ支配していると思われる．一切は一つの神的実在から発展し，自然はただその外面的な現われにすぎず，また精神はその内面的な現われにすぎないとみる．要するに，唯一の統一的宇宙的根源の展開の過程が，一つは精神的方面の発展となり，他は自然の現象となるのである．従ってゲーテにおいては，人間と自然とが対立するものとは考えられなかった．ゲーテの，この調和的統一的世界観からすれば，種々様々な発展をとげている自然の個々のものは，みな一様にその根源を一にするが故に，すべては「神的自然」（die göttliche Natur）としてなんら原理的の差別の存しないわけである．ゲーテにおいては，すべては程度上の

差であって，本質的な価値の差はなく，自然はすべての極端をもみづからのうちに統一する．ゲーテは，みづから天才的な，内的要求に駆り立てられていながらも，天才と凡才との差異性をも，与えられてある能力，性質の濃度，量の差とみる．天才と凡才との差異性は，その共通性にくらべれば全く僅かなものである．

いままで述べてきたったところをみて，人は，ゲーテは主観主義者なるかの疑問をもつかもしれないが，決して彼はそうではない．そのことは私の他の論文[5]においてすでに陳述した所であるが，ここで更に深くこの問題について考えてみよう思う．

Kalischer は，ゲーテの自然探究者としての天分がすでにその少年時代に見出される，ということを刻明に調べ上げて指摘している．

幼いヴォルフガンクは，磁石や紡車や薬びんなどを使って発電機をつくろうと一生懸命になったりした．この少年の姿に，自然的なものに対する少年のあくなき探究心を見出す，と Kalischer はいう．また，1768年12月，ライプッィヒ大学法律科に在学中のゲーテは，激しい疝痛におそわれ，生死をあやぶまれるほどであった．ヴォルフガンクの主治医にドクトル・ヨーハン・フリードリッヒ・メッツという人がいた．昔は自然の普遍的な霊からあらゆる病気に効く万能薬をつくり出す方法や，あらゆる金属を黄金に変ずる方法を見出しうるものと信じていたが，このメッツという医師は中世神秘哲学に興味をもっていた人であると同時に錬金術の研究家でもあった．そして彼は独自の秘薬をもっていた．しかし彼はこれを容易に用いようとはしなかった．ゲーテの父母はわが子の危機にのぞんでメッツにその秘薬を投ずることを切望してやまなかった．そこでメッツは，夜中，自宅に走ってこれを持ち来りこれを試用したのであった．この投薬以来，ゲーテの病は不思議にも好転していった．果してこの秘薬が恢復をもたらした主因であったかどうかは不明であるが，この体験がゲーテをして中世神秘哲学に興味を強くもたせしめたことは事実である．ゲーテはこの

とき以来，友人のクレッテンベルリ嬢と顧問官夫人とともに化学的＝錬金術的研究を始めたのである．当時のヴォルフガンクは，ヴェリンクの魔法口伝書（Opus Mago-Cabbalisticum）や，自然学者で医師のテオフラストゥス・パラツェルズスの著書や有機体の中にある霊の力に関する神秘的学説そしてさらには錬金術師バジリウス・ヴァレンティーヌや，ヘルヴェルト・フォン・フォルヒェンブルーンの「黄金の鎖」（Aurea Catena）など，いづれも錬金術的神秘的書物を，非常に熱心に読み研究していた．単に本を読むにとどまらず，彼はすすんで通風爐やフラスコやレトルトを備えて，錬金術の実験や神秘的な霊薬の調製にとりかかった．彼はそれによって生命の神秘をさぐり，霊界と人間界との関連を見出そうとしたのであった．このときの彼の魂には，ドイツにおける伝説の人物，ドクトル・ファウストがすでに生きかえっていたことが想像されよう．

しかし健康回復後学業を完成するためにライプツィヒからシュトラスブルクに赴いたゲーテは，ここで眼病治癒の目的で滞在していたヘルダーを知り[(6)]，その人道主義に強く影響され，この神的なものをとくに人性の内面において示現されるものと解した．この点からして，ゲーテは，シェクスピアの戯曲において，またギリシア，ローマの芸術的作品において，広くして純粋なる，人間の魂に流露する神を見極めようとした．このようなゲーテの追い求めた至高の実在神は，一体いかなる特性をもったものであろうか．この至高の実在と，ゆらぐ現象の絶えざる流転生成とは，いかに関係するであろうか．その存在を神に負うところの，われわれの中に存する，神に逆らうある種の力は，そもそも何ものであろうか．有限の個性をもって無限に対しようとする人間が，みづからまねく宿命の痛ましい悲劇の諦観，宇宙における，そしてまたその極少としての個的生命における一切の謎は，あの『ファウスト』一篇の中に，こよなく美しく，いとも壮大に象徴され詩化されているであろう．

ファウスト――彼は，あらゆる学問を究めつくしてなおかつ宇宙の真理

をつかまえることができず，自分を一匹のむく犬にひとしいとみづから悩み苦しむ思索の人であった．しかしファウストは，その生涯を学究にささげ，しかもなお青春の血にあふるる情熱の人でもあった．そしてさらには，地上の世界における悦楽によっては決して心の満されなかったことを知りつつ，しかもなおこの世の悦楽に心を引かれざるをえなかった行為の人でもあったのである．ゲーテは，このようなファウストのなかに，彼自身の姿のみならず人間そのものの本来の姿を象徴しているのであろうか．ファウストの心の中には，二つの魂が住んでいたのである．一つは崇高なるもの，無限なるものに憧れ，宇宙の真理を把握せんとする魂である．他の一つは，それにもかかわらずあくまでも，地上的なもの，感性的なものの享楽に執着する魂である．前者は神に向い，神に近からんとする魂であり，後者は悪魔にあやつられることを敢えて欲するところの魂である．そしてゲーテのファウストは，この二元の世界の斗争を通じて，不断の努力をつづける．彼はこの二元の世界の間にあって，つねに，彼の生命の根底において悩みつづけるのである．これがファウストにおける本質的なものであった．そして，それはまた，一般に人間の生命の，自己に忠実に生きんとする姿の様相でもあったのである．

ゲーテのファウストは，みずからの内からの無限の要求に駆られて思い迷い，自己の純粋な要求を積極的に肯定する自己と，これを否定する魂メフィストフェレスとの斗争の苦悩を生き，しかしついに悪魔に敗れたのである．神は果してこのファウストを救うであろうか，それとも彼を見捨てるであろうか，これがこの詩劇一篇の中心問題であった．

ファウスト自身は，その全生命の内奥において，つねにこの二元の悩みに悩みながらも，その二元の斗争を通じて，つねに，より崇高にして，より純粋になろうとする，あくことのない憬れ，不断の行動があった．そして，神には，つねに，彼を救おうとする永遠の愛があったのである．

Wer immer strebend sich bemüht,

Den können wir erlösen.
Und hat an ihm die Liebe gar
Von oben teilgenommen.

不断に努力する人，ファウストは，それゆえにこそ救われるのである．Sehnsucht と Streben——これこそが人間の生命そのものなのである．もし有限なる人間が，無限に生きる，ということがありうるとすれば，それはかかる憧れと努力とをもって，おのが生命を生き抜くときにのみ可能となるであろう．真に生くる有限は，それ自身，無限である．

Ach Gott! die Kunst ist lang;
Und kurz ist unser Leben.

(Faust. Erster Teil)

そしてわがファウストは，ただこの永遠の憧れと不断の努力のゆえにこそ，神に救われたといえよう．

「幾万年を経ても，わが地上にのこせしこの行為は滅し去ることはあらじ．いまこそわれは，かかる無上の幸福を予感しつつ，最後の瞬間を味う．」（フッウスト倒る）

人間は，根源的には無限なるもの，無底の底に支えられておりながら，現実においては有限であるがゆえに，その無限を尽しえない個性の宿命というべきものをもっているのであろうか．ファウストの悲劇と破滅の原因は，一つには有限の個性をもってして無限を超えんとしたところに，もう一つにはその同時達成のために，人間の力を超絶した魔力を使用せんとして自己の魂をメフィストフェレスに売り渡したところにある．ファウストは，あくまでみづからの個性において永遠の努力をつづけるべきであった．悪魔の力をかりたということは，この人生の永遠の努力を一挙にしてかち得ようとするものであり，それは人間の本来的な使命への反逆，人間の本来的なあり方への反逆であった．しかもファウストは，神の救うところとなり，天使に運ばれていったのである．これはなぜであろうか．これ

は永遠の生命と真理とを求めてやまなかったファウストの永遠の憧れと不断の努力ゆえに救われたのである．永遠の生命と真理とを求むるに，その手段にして誤れるところがあっても，神は彼の意図と努力とにおいて嘉しとされたのである．ゲーテの立場からいえば，人間はすべて感性的生活を通して文化的意義を捉え，個性的生活を通して社会的，全体的意義を捉え，個人的行動において歴史における永遠の意義を捉えることができる．ファウストは，最後まで自己の個性における永遠の努力をもって，否その努力そのものに意義を認めて自己の目的を達成しようとはしなかったために，みづからに悲劇をもたらしたわけであるが，またしかし，この有限の悩みのなかに，ファウストの決して滅びることのない生命があったのである．ファウストが，自己の有限性からくる一切の苦悩を克服し，人間的生命の無拘束性をかちとろうとしたところに傲慢な，しかし純粋なファウスト的要求があったのである．そしてこの要求を通して残した行（Tat）のゆえに，彼は，有限のまま救われたのである．ファウストは，悪魔の力を使ったことの非を悟り，一個の人間として，ただ人間であろうとする努力の正しさを自覚し，現実の仕事を通して無限の個性とのかかわり合いにおいて，そこに個性的生命の真価を見出したのである．

ファウストは，その半生にわたる学究生活において，およそ人智の限りを究めつくし，あますところないまでにいたったが，にもかかわらず彼の魂はそれに満足しなかったのである．なぜか．彼は人智の究極に到達したいまにしてはじめて，自分の求める真理が，いままで研究しきたった学問のいかなる部門の中にも見出せないことを悟ったからである．ファウストは，いままで非常に苦労して獲得した自己の学的成果を，まったく価値なきものとして，恰も敝履の如く棄て去ったのである．彼の魂は，万巻の書物の中に，その安住の地を見出すことができなかった．この心境は，わが日本の親鸞が，万巻の教典の中にみずからの魂の救いを見出せなかったときのそれに通ずる所がないであろうか．ファウストの場合，いかに彼が，

彼の心が悩み苦しんだことか，恐らく想像に絶することであろう．「一切を知る者」としての誇りは，一挙にして，「一切を知らざる者」としての無知の自覚に直面する．ファウストの詩劇は，実に，この心的転換の最も緊張せる瞬間にはじまるのである．このファウストの心は，まったく「強靱」の一言につきるであろう．なぜなら，半生を傾けて得た知的財産を，よしんばそれが無価値だと認識されたにせよ，否，多少の非が見出されたにせよ，これを全く「敝履」を棄てるが如くにしてかえりみない，という心的態度は，決して常人の容易にとりうる態度ではないからである．この，真理に直面する純真にしてひたむきな心，この心こそ神へ向う心であり，神を求める心にほかならないであろう．かってヘーゲルが，ベルリン大学で行なった演説（1818年）の結語に曰く，「真理の勇気，精神の威力に対する信念，これが哲学研究の最初の条件である．人間は自己自身を敬い，みずから最高者に値するものと思わなければならない．精神の偉大と力とは，いかに高く評価するも過ぎるということはない．宇宙の秘められた本体にも，認識の勇気に抗う力はなく，心ずや開かれてその富みと深みとを眼前に現わし享受せられるにちがいない」と．認識の可能根拠に対する見解は異るにせよ，真理に向わんとする精神の根本態度には両者相通ずる所があるであろう．ゲーテのファウストにおいて，真理を求め，神に向う心は，そのまま自己の魂の真実の救いをもとめる心でもあった．それは，世界をその深みにおいて統合するものを認識せんとする心であり，この認識はそのまま神の認識にほかならなかった．この認識は，学的認識ではなく，体験的直観を通してのみ予想される意味のもの，すなわち，ファウストの生命の全存在がそれに依存する性質を有するものである．ファウストがこれまでに獲得してきた学問的知識というものは，世界の分析的知識の断片的集収にすぎないものであった．それはいわば材料的のものであった．かかる材料的なものの集合においては，真の有機的生命の如実の相を求めることは不可能であろう．生命というものは，本来的に，つねに全

体的把握を予想するものである．

すでに述べたように，ゲーテの根源的統一，根源的調和の観点からすれば，多様な発展を遂げる自然の個個のものは，ひとしくその根源を一にするわけであるから，すべて一様に「神的自然」として，なんら原理的の差別は存在しなかった．この点では，ゲーテはスピノザからの影響を受けていることを認めざるをえないのであり，神即自然 Deus sive Natura を信じていたとみてよいであろう[(7)]．ゲーテが自然と人生とに対していだいた根本的の興味はどこにあったかといえば，それは神と個性との関係であろう．ゲーテは，自然即神，個性即神，つまり神は個性の完全調和の状態において存在する，とみたのである．ゲーテは個を全体においてみたのである．ゲーテが個々の対象を研究考察するときの態度においては，いつも全体的な直観が先行していたのであった．それは全体的洞察のもとに個を捉えんとする態度であった．ゲーテは，自然の種々雑多な現象を全体としてみ，自然の変化を連続的発展として捉えたのである．ゲーテの進化論的自然発展の根底には，このような統一観，完全調和観が支配している，とみられる．ゲーテは，一切のものの根底には原形 (Urform) というものがある，それは一切の発展過程の根底における完成作用 (Entelechie) と考えられた．「原形」の考えは，ゲーテの自然研究の根本にあるものである．これに関連する概念として「原現象」(Urphänomen) というのがあるが，これは1790年に出た "Die Metamorphose der Pflanzen" にみられる概念である．彼はそこで一個の花の開き行く状態を想像し，これを描写しているのであるが，この発芽する創造物を固定して描写することの不可能なることを述べている．彼は植物の多様な変形の始原植物を直観し，描写した．彼はある一個の現象の根底には，それぞれの原現象としての原形が実在する，と信じていた．そして彼はこの原形を自然 (Natur) または本質 (Wesen) と称したのである．このようなゲーテの Urform, Urphänomen の思想は，ある意味においてアリストテレスにおけるイデアの考え方に近

いものであって，プラトンのイデアの数学的な純粋形相に比して，より具体的且つ動的であり，豊かな芸術的直観と想像力，構想力により成るものであった．しかもかかるUrformを根底として展開される自然の進化の有様は，そのまま神の有意的目的に適すものである，という予想をゲーテはもっていたのである．しかも彼は自然の進化を，神によって固定的に絶対不変の途を歩まされるもの，というふうには考えなかった．むしろ彼は変転極まりない自然の無限の発展のなかにこそ神の姿を見出したのである．ゲーテにおいては，自然は神の芸術的創作にほかならなかった．そしてこの自然の法則は，同時にまた人間の芸術の内面的法則でもあった．高尚なる芸術的作品は，同時に真に自然的法則にしたがって人の作った最高の自然物なのである．

最後にさきに一寸ふれたEntelechieについて述べる．

ゲーテは宇宙の真の生命の内容は個性的である，と考えたのである．個性，それは生命の根源的素質の生ける発展であり，そこにおいて理念と現実とは合一せられるであろう．個性は一つの実在でありながら同時に一つの働きである．この，理念と現実，無限と有限とを相即的に合一せしめる所の，現実に働く実在を，ゲーテは個性といい，これを彼は後年，ライプニッツとともに“Monad”と呼んだり，あるいはアリストテレスにならって“Entelechie”と呼んだのであった．この概念の由って来る根拠は，彼の豊かな生活経験と，彼のすぐれた生物研究のなかに求められるであろう．彼が生物を研究した究極の目的は，有機体の諸現象の根底にあるUrformを見出す，ということであった．この原形を保持しつつ発展せしめる根源的な働き，それがエンテレキーなのである．アリストテレスによれば，エンテレキーとは，形式（Form）の原理であると同時に発展の原理でもあった．植物が形式原理を一方において保持しながら，他方において自己改造することによって発展するように，個々の精神的な人間の生（Leben）は，このエンテレキーとよぶ本質的原理を探究，発見し，みづ

からを保持しつつ改造するところに成り立つのである．エンテレキーとは，結局，自己現実の法則である．“Werde, der du bist.”「汝があるところのものに成れ!」この言葉はさらにすすんで，“Stirb und werde”「死ね，そして成れ!」にいたり，キリストの蘇りの精神に通じる．死して，かえって永遠の生命を得るということ，キリストは十字架に死して，かえって人類のなかにその生命を永遠ならしめたことを想起せよ．自己発展の過程は，永遠の，自己への回帰の過程である．自己の完成は自己があるところのもの，に成ることである．自己化と自己脱却 (Verselbsten und Entselbstigen)，これが神の Absicht に適し人間の生の実相なのであろうか.[8]

註(1)　Die Wahlverwandtschaften. 1809.　この作品には，人間が人間と出合うとき，あるふしぎな力が働いて結合離反を生ぜしめることが，情熱と倫理の間の心の葛藤を通して描かれている．

註(2)　Deukalion.　プロメテウスの子．ゼウスが人類の亡恩を怒って大洪水を下したとき，父プロメテウスに教えられて舟（ノアの方舟）を作って難を避け，舟はパルナッソス山に漂着した．洪水が退くと，神の教えに従って石を肩越しにうしろへ投げた．夫デウカリオンの石は男になり，妻ピュラの石は女となった．この夫妻の長男は．ギリシア民族(ヘレネス)の伝説的父祖となったヘレンである．

註(3)　Vgl. über des Dichters “anthropologische Gymnastik” Schöll, (Goethe in Hauptzügen seines Lebens und Wirkens. Berlin 1882.) S. 62.

註(4)　idem. S. 179.

註(5)　拙稿「ゲーテと教育学との関係，およびゲーテに対するわれわれの視角について」，『哲学』第46集所収．

註(6)　1770年，ヘルダーが眼病治癒のためシュトゥラスブルクに滞在していた．すなわち彼は愛人と結婚する前に，幼時から悩まされていた涙嚢をシュトゥラスブルクで手術してもらおうと思ったのである．そういうわけでヘルダーは1770年から71年の冬にかけて，ゲーテと同じ町にいたのである．当時ヘルダーは若少（26才）ながら文学や芸術の少壮批評家として世に知られていた．一方のゲーテはまだ21才の無名の学生であった．ヘルダーは波瀾に富んだ人生と．かくも顕著な成功とをすでに有し

ていた．彼のうちには早くから身につけた生活の厳しさ，過去において優秀な業績をあげたという意識だけでなく，今後のドイツ精神界を革新することになる思想を自己において担っているのだという高い意識があった．そしてかかる意識が彼の年令以上の威厳を彼自身に与えていたのである．そして，その相手というのが．男や女からちやほやされた軽佻浮華のヴォルフガンクだったわけである．なにかといえばすぐ馬鹿さわぎをしたり，飛んだり跳ねたり，つまらぬことに大声をあげたり，そうかと思うとテーブルのまわりを躍ったり．しかめっ面をしたりする，まだ子供っぽいヴォルフガンクである．旅館ツーム・ルーヴル（現在ザルツマンガッセ7番地）のヘルダーの病室へ毎日のようにゲーテがやってきて，どんな不機嫌な顔をされても——ヘルダーはゲーテに対して軽蔑しかもたなかった．そして辛辣な嘲罵を以てこの軽薄児を治癒した——病人のお相手をすることに倦んじなかった．ゲーテは熱心にヘルダーから新しい生命を吸収した．ヘルダーのゲーテに対する態度言行は決して快いものではなかった．ゲーテはヘルダーから屢々叱責や非難をうけたが，ゲーテはこれを大いなる善意と解していた．ゲーテはヘルダーによってはじめて文学の進むべき新しい努力と方向とを知らされたと述懐している．ゲーテとヘルダーとの出会いや交渉については「詩と真実」の第10章を参照されたい．

註(7)　「ゲーテのスピノザ研究」(『ゲーテ』木村謹治著，弘文堂，昭和13年，所収)．"Aus der Zeit der Spinoza-Studien Goethes" in: Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften II. B.G. Teubner, Stuttgart. 1960.

註(8)　"Dichtung und Wahrheit" 参照．